

# 現代青年学徒における思想傾向について

北 野 栄 正

## I 問 題

青年の学生は、青年の典型的な存在であると思われる。それは、彼等の知識と技能がやがて将来の社会を形成すると思われるからである。心理学で思想という場合は、思考の働き、思考の内容のことである。したがって、学生思想というと、学生の思考の働き、思考の内容ということになる。しかし、学生思想として、これまで問題とされてきた本質的な起点について、一応考察しなければならない。

そうすると、先ず学生思想として、問題とされた学生の思考内容とは何か、という問いが必然的に起こってくる。しかし思考内容となると、まことに多義にわたっていて必ずしも明白に規定できないが、従来からそうであったし、また現在でも、思想問題、過激思想、学園紛争など、と問題とされるのは、少なからざる学生が左翼思想をもっていて、それが学校の教育と研究のうえに大きな影響を及ぼすからと思われるのである。それでは、左翼思想とは何か、という問題に一応触れてみなければならない。左翼思想については、つとに、河合、蠟山(1938)は、とくに、左傾思想といい、マルキシズムの思想を指すとして、その内容を唯物弁証法の哲学、社会主義的経済社会思想、暴力革命の是認をあげ、これら全般に該当する内容をもっていることをマルキシズムの思想といっている。

しかし、これらマルキシズムの思想を学問上からみると、唯物弁証法の哲学は一斑の真理を含んでいる。また労働価値説を出発点とし、余剰価値説を中心とした資本主義の解剖は、経済理論として正当か否かの議論の余地はあるとしても、経済上の問題であり、資本主義が崩壊して、その結果、社会主義が実現するという見方は、唯物弁証法的な見方よりくるもので、唯物

弁証法に立つ限り多分に真理を含んでいる。のみならず、マルキシズムは、従来、学問上に幾多の問題を提起し、いかに学問上に貢献したかは疑う余地はないし、また青年学生社会観、社会的態度に寄与してきた功績も評価しなければならないと思われる。そうすると、以上の学問上からする内容の思想自体は問題の対象とならないのであるが、ただ以前の国体がマルキシズムの思想と相容れない内容として、問題とされてきたものといわなければならない。また、暴力革命の是認であるが、戦後の議会主義と言論の自由による平和主義をとる我が国の民主主義とは矛盾するので、同じく暴力主義をとる右翼思想に対しても、同様に学生思想として問題としなければならない。ところが従来、右翼思想による暴力是認があまり問題にされなくて、学生のマルキシズムが問題にされたのは、マルキシズムによる学生の暴力是認によって、しばしば、教育と研究が妨害され、学校の秩序が破壊される可能性が多かったことによるものといわなければならない。以上が従来の学生思想問題としての本質的な起点であると思われる。

現在、学生運動の組織も、多くはマルキシズムの影響をうけており、現行体制の否定のもとに暴力を是認し、過激な思想として既制の思想と対立し、越え難い断絶を示して、学生思想として問題とされている。また現在の青年学生の多くに、既制の体制を否定せんとする傾向にあることも見逃すことができない。しかし、以上の傾向も、彼等が卒業後職業的に活動を続ける一部の者を除いては、大部分は既制の体制をも認容せんとする傾向にあることも見逃せない。さしもの激しい現行体制の否定が、既制の体制の中に昇華されたのであろうか。

これらの傾向を、権威に反抗し、表面的な既制の体制を否定せんとする青年特有の一時期として、あるいは青年特有の主観性や自己顕示と

して、理解しているのではなくして、これらの青年学生思想傾向を社会的状況と関連させながら、発達心理学のなかでとらえることが、青年心理学の新しい課題となるのではないかと思われる。

学生思想という、学生の思考の働き、内容のことであるが、各人それぞれの思考の働き、内容は現実社会の中に社会的態度となって、各人の社会的行動を規定しているものと思われる。したがって、ここでは、学生思想を社会現象に対する学生の一定の精神的傾向、主観的判断の意味に規定する。

社会が青年に要請する社会化の過程で、とくに重要な問題となるのは、政治的、経済的、社会的な自立の問題であり、社会的現象の具体的な場面において、政治的、経済的、社会的問題についての一定の精神的傾向、主観的判断の確立であり一態度による選択的行動の要請であると思われる。ここに、学生思想傾向としての態度の測定が起ってくる。

それでは、思考の働き、内容の具体相としての態度とはいかなるものであろうか。態度は元来行動への主観的、精神的な準備状態という意味をもっている。態度の機能が明らかに認識されるようになったのは、すでに前世紀からであって、実験心理学においては、反応時間の研究をはじめとして、知覚、記憶、判断、思考、意志などの実験で、Aufgabeといわれる心理状態が、被験者の準備性として、中心的な重要な役割を果たすことを認識されるようになったのである。このように態度は精神的一身体的な準備状態として、いろいろなレベルの心身のはたらきに関連していると考えられるが、Droba (1933) も、態度の概念について、有機的準備説、一般説、行動説、精神的準備説の4つの型に分類しているが、このような態度の概念の分類を貫いた共通の本質は、態度を行動するための準備、用意として考えていることである。

このように、態度は、精神的一身体的準備状態として、一定の対象に対して価値判断をふくむ行動傾向であるが、態度の形成はつねに社会的場面においておこなわれ、またその機能的意

味は、対象の属性のいかんによって基本的に異なるものではないので、態度からとくに社会的態度を区別して意味をもたせることは、重要な問題ではない。ただ、対象が社会現象あるいは対人関係をふくむ場合を社会的態度といえよう。従来すでに、多くの社会的現象や対人関係における態度の因子分析的研究から、社会的態度の要因として、すでに、Carlson (1934) は第1因子を知能の因子、第2因子を急進主義—保守主義の因子、第3因子を宗教的因子とし、Thurstone (1934) は急進主義—保守主義、さらに、Ferguson (1939) は、急進主義—保守主義的因子、宗教奉信的態度、人道主義をあげ、Johnson (1942) は、急進主義—保守主義の因子をあげ、Eysenck (1944) は、第1因子を急進主義—保守主義、第2因子を合理的、科学的—感傷的、情緒的、第3因子を干渉からの自由—強制的愛好、をあげ、後程、第2、第3因子をそれぞれ、意識的フェミニズム、人道主義とした。Sanai (1951) は、“いろいろな実験の結果から想像すると、社会的態度に一般的な保守—革新の要因があるのみである” (Sanai, 1951, P. 245) といっている。田中 (1954) は、第1因子として急進主義—保守主義、第2因子に国家主義—非国家主義をあげ、また、松山、田中 (1954) は、第1因子に一般世俗型、第2因子に反世俗、自己主張型をあげ、さらに、田中、松山 (1955) は、R因子 (急進主義 Radicalism) — (保守主義 Conservatism) と T因子 (柔い心 Tender-mindedness) — (堅い心 Tough-mindedness) をあげている。以上のように、態度の因子分析的研究の結果からは、いろいろな態度の因子が分析されるものと思われるが、社会生活における個人の態度というものは、個人の断片的なる社会生活を内的に関係づける傾向あるいは傾性であって、社会的態度の一般的特性として、量的な差異はあれ、もっとも主要な態度次元のひとつが、とくに政治、経済、社会の伝統を重んじ、現状を固守維持しようとする態度と伝統に対決し、現状の政治、経済、社会に対して何らかの変容を加えんとする態度である。社会生活において、前者を保守的態度という

ならば、後者を進歩的態度といえよう。Vetter (1930) も、進歩的あるいは保守的態度の持ち主は、社会的、政治的、美的にも、進歩的あるいは保守的態度をもっていることをみいだしている。また、Katz と Allport (1931) は、“いろいろな態度への一貫性は、それぞれのパターンの態度に適合する” (Katz & Allport, 1931, P. 48) と述べている。Murphyら(1937) も、“社会生活においてもっと普遍的一般的な態度は保守、進歩を両端とする連続的な人格特性が考えられる” (Murphy, et. 1937, P. 896) とし、Newcomb (1943) も、社会的態度、とくに政治的態度として、保守性と急進性をとりあげている。わが国においても、経済、社会的事象について、中邑(1967)は、保守一革新の態度をとりあげているが、とくに政治的事象について、主要な態度の次元のひとつに、保守一革新があると多くの研究がある。田中(1964)は、日本人の政治的態度のなかに、保守一革新の次元が存在することを確認し、京極(1962)、鮑戸(1970)、広瀬(1971)、なども、政治的事象を保守一革新の次元でみるという制度が、わが国の社会に定着しているとしている。しかし、従来、社会的行動の基礎過程から社会現象まで、比較的包括的に説明できるものとして、Sanai (1951) の社会的態度の因子分析の研究の結果から、社会的態度は保守一革新の一般因子があるのみと思われる。著者(1952、1955、1970)も「進歩一保守的態度」を典型的な社会的態度として研究をなしてきた。

それからこれまでの態度測定法の多くは、単一な両極的連続体上に意見項目を位置づけて、その認知水準を問題としてきた。これらのことから、手続きの上で対立的、両極的概念の形で政治、経済、社会的概念を提起し、その認知水準をもって思考の働き、内容としての社会的態度の方向を明らかにしうるものと思われる。したがって、本研究においても、一般的な社会的態度を進歩的と保守的の両極態度に分類し、青年学生の思考の働き内容として、政治、経済、社会的態度を考察することとする。

人の態度を考察するとき、従来、或特定の問

題について測定され、類型的な考察がなされてきた。しかし、或人の行動が或類型にあらわれたとしても、その人のすべてがその類型にあらわれるとは限らない。従来の陥入りやすい弊害は、学問的な思索と現象的な現実を理想的な立場において考察せんとしたことである。が、従来の学問的なsystemから現実を考察せんとするよりも、むしろ、現実的なものをsystem化することに向けなければならないと思われる。青年学生 of 思想としての社会的態度を考察するにあたって、青年のありのままの現実性から組織化と系統化がなされなければならない。そして青年学生 of 抱く精神的傾向、主観的判断の現実的な働きかけは、現実の社会現象の雑多のなかにもっともよくあらわれているものと思われる。それから従来、態度測定の研究においては、実験者自らの観念からテストの項目を決めて、これを被験者に用いる方法がしばしばとられてきた。この方法は、勿論、組織的でしかも処理に便宜な方法であるが、他面、項目の決定において、ややもすると実験者の主観が入ることが多く、しかも被験者がその項目の表わす内容よりも、字句にとらわれることの多いことも見逃すことができない、といわなければならない。それから、社会的態度には、二様の意味があって、理論としてその人のもつ態度と、もう一つは日常われわれの身边に起こる事象に対してとる態度であるが、社会現象に対する一定の精神的傾向、主観的判断は、後者の意味において考察することはいうまでもないことと思われる。

## Ⅱ 方 法

前にも述べたように、精神的傾向、主観的判断の現実的な働きかけは、現実の社会的現象の雑多のなかにもっともよくあらわれ、とくに政治、経済、社会的現象のうちに態度となってあらわれるものと思われる。このような考えにもとづいて、著者は、日常我々の見聞した国内および国際的現象について材料を蒐集したのである。昭和50年度中、国内および国際的に重要な社会現象は次のごときであった。

すなわち、

1. 米軍ベトナムより撤兵
2. 統一地方選挙
3. 国際婦人年世界会議
4. 天皇陛下米国御訪問
5. 先進六カ国首脳会議

6. 公共企業体等労働組合スト権スト

以上6種の社会事象について、大学生72名にできるだけ多くのステートメントを作らせ、各ステートメントを3句、44音節からなるように作製せしめた。そして、各ステートメントをとりあげるには、次のような手続きをへた。

1. 各ステートメントは社会的態度を直接引き出すような性質のものであること。

2. 複合的意味をもつステートメントは避けること。

3. 各ステートメントは被験者が現在もっている態度を表現するものであること。

以上の結果、適当なるステートメント43個を得た。次に、この43個のステートメントが果たしていかほどの社会的態度を示しているか、客観的に決定する必要があるので、多数の意見を聴いて確かめようとした。すなわち、大学学生（意見蒐集の学生と別）50名に、各ステートメントを各人が、そのステートメントに賛成か反対かを問わず、純粋に客観的に判断して、各ステートメントが現実の社会にとって、進歩的な

Table 1

カテゴリー	ステートメント
政治	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 力の弱い国は、力の強い国の核の傘のもとで、保護されなければ生きのこれない。(＋1.5)</li> <li>2. 日米安全保障は、国民の総意にもとづき、侵略の不安を除くものである。(＋1.3)</li> <li>3. 立派な社会を作るには、話し合いよりも、強力な指導者にまかせることである。(＋2.7)</li> <li>4. 日本の国の政治は、歴史と伝統をもっている天皇陛下が、とち行うべきである。(＋3.0)</li> <li>5. 日本の生活が豊かになったのは、今まで保守政治が、よい政治をしてきたからである。(＋2.2)</li> <li>6. 実力があれば、たとえ女性の代議士であっても、総理大臣になって当然である。(－2.0)</li> <li>7. 大国の軍隊が、外国に駐留するのは、小国への内政干渉である。(－1.2)</li> <li>8. 金持ちが法律を作り、国民に実行させても、国民の生活は楽にならない。(－2.3)</li> <li>9. 国民のみんなが、平和なくらしをするためには、革新の政権を作らなければならない。(－2.3)</li> <li>10. 国民が幸せになるには、革新政治を作って、政治の流れをかえなければならない。(－2.5)</li> </ol>
経済	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 所得に額差があるのは、人間に能力の差がある以上、いたしかたないことである。(＋1.5)</li> <li>2. 経済のことは、自由な競争にまかせておけば、自然と正しいところにおちつくものだ。(＋1.2)</li> <li>3. 賃上げ闘争を繰り返すと、物価が上昇して、生活が苦しくなってくるものだ。(＋1.7)</li> <li>4. 使われている人は、資本家のいうなりになって、一生けんめいに働かなければならぬ。(＋2.5)</li> <li>5. 労働者が組合をつくって、資本家に要求するとは、ふとどきなことといわねばならぬ。(＋2.6)</li> <li>6. 日本が経済大国になったのは、労働者の勤勉と、低賃金政策によるのだ。(－1.8)</li> <li>7. 資本家と労働者の、所得の格差をなくすれば、自由平等の社会ができあがる。(－2.1)</li> <li>8. 世の中が不況になると、生活の苦しみは、先ず労働者にしわよせされるものである。(－1.4)</li> <li>9. 労働組合の活動は、資本家の独善を抑え、経済を民主化することである。(－2.6)</li> <li>10. 不況をなくするためには、自由主義経済より、社会主義経済によらねばならぬ。(－2.7)</li> </ol>
社会	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 自分が正しいと思っても、偉い人のいうことには、だまって従うのがもっともよい。(＋2.3)</li> <li>2. 日本国民は天皇をうやまって、特権階級の復活を、はからなければならない。(＋2.9)</li> <li>3. 金持ちはぜいたくをしていて、貧乏人はまずいものを食べているのは、当然のことである。(＋2.5)</li> <li>4. 我が国の婦人は、社会へ進出することをやめて、もっぱら家事に従事することである。(＋2.1)</li> <li>5. 国民が学ばなければならないことは、権威ある人に、素直に服従することである。(＋1.9)</li> <li>6. いくら伝統や習慣といっても、時代に合わないものは、止めてしまうのは当然である。(－2.5)</li> <li>7. すべての人が幸福になるには、私有財産をなくし、社会主義社会になればよい。(－2.7)</li> <li>8. 生活の安定をまもるためのストライキは、認められているのは、当然といわねばならぬ。(－1.5)</li> <li>9. 納得のいかないことは、いくら恩義のある人のいうことであっても、従わないほうがよい。(－2.4)</li> <li>10. 離婚がたやすくできるように、法律を改正して、世間体などを気にする必要はない。(－1.7)</li> </ol>

意見であるか、保守的な意見であるか、を判定して評定してもらった。すなわち、ステートメントが、

非常 かな 進 進歩 保 かな 非常  
に進 り進 歩 保守ど 守 り守 に保  
歩的 歩的 的 ちらで 的 守的 安的  
もない

-3 -2 -1 0 +1 +2 +3

の段階に評定してもらった。以上の手続きをへて、保守度の高いステートメント15個（政治的ステートメント5個、経済的ステートメント5個、社会的ステートメント5個）、進歩度の高いステートメント15個（政治的ステートメント5個、経済的ステートメント5個、社会的ステートメント5個）、計30個のステートメントを選択し、実験材料とした。その実験材料は Table 1 のとおりである。なお（ ）内は評定点の平均を示しており、政治的ステートメントにおいて、保守的ステートメントの平均値、進歩的ステートメントの平均値は、それぞれ、2.14、2.06 となり、両ステートメントの評定の差は、 $t=0.57$ 、 $df=48$ 、 $P>0.5$  となって、保守的ステートメント、進歩的ステートメントにおいて、保守度と進歩度の尺度におけるウェイトそのものには有意差なしといえる。また、経済的ステートメントにおいて、保守的ステートメントの平均値、進歩的ステートメントの平均値は、それぞれ、1.90、2.10 となり、両ステートメントの評定の差は、 $t=0.61$ 、 $df=48$ 、 $P>0.5$  となって、保守的ステートメント、進歩的ステートメントにおいて、保守度と進歩度の尺度におけるウェイトそのものには有意差なしといえる。さらに、社会的ステートメントにおいて、保守的ステートメントの平均値、進歩的ステートメントの平均値は、それぞれ、2.30、2.20 となり、両ステートメントの評定の差は  $t=0.33$ 、 $df=48$ 、 $P>0.7$  となって、保守的ステートメント、進歩的ステートメントにおいて、保守度と進歩度の尺度におけるウェイトそのものにも有意差なしといえる。

実験は、高等学校生徒、大学学生別に行う。

（注）Table 1 の実験材料を4号活字に印刷（各カテゴリーのステートメントごとに、保守的、進歩的、保守的、進歩的のステートメントの順に印刷し、（ ）と評定点は印刷されていない）したプリントを被験者に渡し、被験者をして、この印刷されたステートメントに対して、真、偽テストを行ったのである。評価の仕方は、

真であることを強く確信しているときは……+2

真であることを確信しているときは……………+1

真か偽か決しかねるときは……………0

偽であることを確信しているときは……………-1

偽であることを強く確信しているときは……-2

と評点をつけてもらった。所要時間は別に制限しなかったが、いずれの被験者も25分以内に完了した。この実験に参加した被験者は Table 2 のとおりである。

Table 2

学 校	男	女	計
高等学校生徒	74	59	133
大 学 学 生	72	41	113
計	146	100	246

### Ⅲ 結果とその考察

Table 1 を実験材料として、高等学校生徒、大学学生による各ステートメントの評定の結果は、Table 3 に示すとおりである。Table 3 は各ステートメントごとに、各5段階評定において百分率で示してある。Table 3 によると、全般的傾向としては、高等学校生徒、大学学生、男女とも、政治、経済、社会の各カテゴリーをとおして、保守的ステートメントには、真であるとするものよりも偽であるとするものが多く、また、進歩的ステートメントには、偽であるとするものよりも真であるとするものが多くなっている。したがって、高等学校生徒、大学学生をとおして、男女とも、政治、経済、社会的現象について、かなり進歩的態度の傾向をもってしているものといえる。

なお、政治のカテゴリーのステートメントに

（注）従来の研究調査の結果から、中学校生徒は、政治、経済、社会的知識は低く、それらの態度は未分化的状態にあることが指摘される。本研究の特質上、中学校生徒は調査対象から除いたのである。

Table 3

カテゴリー	態 度	S R S	高 校 男 子					高 校 女 子					大 学 男 子					大 学 女 子				
			+2	+1	0	-1	-2	+2	+1	0	-1	-2	+2	+1	0	-1	-2	+2	+1	0	-1	-2
政  治	保  守	1	9.5	32.4	12.2	21.6	24.3	5.1	15.3	22.0	42.3	15.3	6.9	23.6	8.3	30.6	30.6	—	17.1	24.4	24.4	34.1
		2	8.1	8.1	54.0	14.9	14.9	5.2	18.8	55.9	13.7	6.4	5.5	13.9	22.2	27.8	30.6	4.9	24.4	17.1	31.7	21.9
		3	12.2	12.2	8.1	25.6	41.9	3.4	8.5	10.1	35.6	42.4	6.9	9.7	13.9	29.2	40.3	2.4	7.3	9.8	36.6	43.9
		4	2.8	1.3	4.0	14.9	77.0	1.7	3.4	6.8	18.6	69.5	2.8	1.4	4.1	16.7	75.0	—	—	2.4	24.4	73.2
		5	4.0	6.8	40.6	27.0	21.6	1.7	6.8	38.9	44.1	8.5	4.2	9.7	44.4	29.2	12.5	—	4.9	46.4	26.8	21.9
	進  歩	6	24.3	29.7	17.6	6.8	21.6	40.7	37.3	10.1	8.5	3.4	34.7	37.5	11.1	5.6	11.1	48.8	26.8	17.1	2.4	4.9
		7	31.1	32.4	24.3	4.1	8.1	10.2	35.6	42.4	11.8	—	25.0	50.0	12.5	9.7	2.8	31.7	41.4	21.9	2.5	2.5
		8	60.8	14.9	8.1	4.0	12.2	69.5	8.5	3.4	8.5	10.1	58.3	20.8	11.1	5.6	4.2	51.2	26.8	12.2	2.5	7.3
		9	10.8	18.9	45.9	12.2	12.2	5.1	3.4	67.8	18.6	5.1	15.2	20.9	36.1	20.9	6.9	7.3	29.3	39.0	19.5	4.9
		10	12.2	17.5	45.9	12.2	12.2	6.8	10.2	66.1	13.5	3.4	12.5	23.6	38.9	18.1	6.9	2.4	29.3	48.8	14.6	4.9
経  済	保  守	1	18.9	50.0	4.1	16.2	10.8	22.0	30.5	5.1	23.7	18.7	16.7	41.6	16.7	9.7	15.3	9.8	43.9	14.6	17.1	14.6
		2	2.7	12.2	21.6	29.7	33.8	3.4	5.1	23.7	47.5	20.3	2.8	11.1	12.5	40.3	33.3	4.9	2.4	14.6	36.6	41.5
		3	40.5	24.3	25.7	8.1	1.4	27.1	27.1	37.3	8.5	—	15.3	37.5	26.4	15.3	5.5	9.8	39.0	26.8	21.9	2.5
		4	6.8	6.8	12.1	21.6	52.7	1.7	3.4	11.9	38.9	44.1	1.4	5.5	4.2	27.8	61.1	—	—	7.3	24.4	68.3
		5	4.0	1.4	8.1	28.4	58.1	1.7	3.4	20.3	32.2	42.4	2.8	1.4	2.8	20.9	72.3	—	2.4	—	19.5	78.1
	進  歩	6	13.5	36.5	33.8	10.8	5.4	11.9	30.5	37.3	18.6	1.7	25.0	44.4	22.2	4.2	4.2	31.7	48.7	9.8	9.8	—
		7	4.1	20.3	24.3	28.4	22.9	6.5	27.3	30.6	18.7	16.9	1.4	29.1	23.6	26.4	19.5	2.4	17.1	24.4	34.2	21.9
		8	37.8	43.2	12.2	2.7	4.1	50.8	35.6	6.8	6.8	—	48.6	43.0	4.2	4.2	—	68.3	29.3	2.4	—	—
		9	28.4	33.8	28.4	2.7	6.7	18.6	32.2	44.1	3.4	1.7	29.2	44.4	18.1	6.9	1.4	29.3	48.8	14.6	2.4	4.9
		10	8.1	17.6	37.8	17.6	18.9	8.5	22.0	52.5	10.2	6.8	6.9	19.5	48.6	16.7	8.3	7.3	21.9	39.0	17.1	14.7
社  会	保  守	1	1.4	—	5.4	20.3	72.9	—	—	8.5	23.8	67.7	—	4.2	12.5	30.5	25.8	—	—	9.8	31.7	58.5
		2	4.1	5.4	5.4	12.2	72.9	—	—	16.9	25.5	57.6	—	4.2	5.5	12.5	77.8	—	—	2.4	14.7	82.9
		3	20.3	13.5	12.2	16.2	37.8	8.5	8.5	18.6	11.9	52.5	6.9	13.9	8.3	30.6	40.3	2.4	9.8	4.9	14.6	68.3
		4	18.9	18.9	25.7	21.6	14.9	6.8	5.1	5.1	28.8	54.2	6.9	6.9	12.5	54.2	19.5	—	—	9.8	12.2	78.0
		5	4.1	12.2	9.4	31.1	43.2	—	6.8	25.4	30.5	37.3	4.1	1.4	2.8	26.4	65.3	—	2.4	4.9	9.8	82.9
	進  歩	6	27.1	13.5	21.6	21.6	16.2	16.9	16.9	20.4	30.5	15.3	8.4	22.2	20.8	34.7	13.9	4.9	17.0	19.5	46.4	12.2
		7	6.8	10.8	27.0	28.4	27.0	5.1	10.2	38.9	28.9	16.9	4.2	9.7	34.7	31.9	19.5	4.9	4.9	29.3	39.0	21.9
		8	36.5	31.1	16.2	6.8	9.4	25.4	42.4	20.3	10.2	1.7	40.3	40.3	13.9	4.1	1.4	53.7	36.6	7.3	2.4	—
		9	39.2	36.5	17.6	4.0	2.7	20.3	38.9	18.7	13.6	8.5	27.8	40.2	13.9	16.7	1.4	26.8	39.1	19.5	7.3	7.3
		10	14.9	17.6	45.9	6.7	14.9	13.5	11.9	40.7	23.8	10.1	8.3	25.0	27.8	23.6	15.3	14.6	24.4	34.2	24.4	2.4

において、真であると確信するもの、あるいは偽であると確信するもの、の顕著なステートメントについて考察する。

保守的ステートメントでは、「天皇主権」とするステートメントであるが、高等学校生徒、大学学生、男女をとおして、偽とするものが多くなっている、主権在民が高等学校生徒、大学学生、男女をとおして定着していることがうかがえる。

また、進歩的ステートメントでは「外国軍隊

駐留を内政干渉」とするステートメントであるが、高等学校男子では真とするもの、高等学校女子では真か偽か決しかねるもの、がそれぞれ多くなっているが、大学学生になると、男女とも真と確信するもの多きに移行している。次に、「金持ちで作った法律は、国民生活を楽にしない」という、ステートメントであるが、これは、高等学校生徒、大学学生、男女とも、真とするものが多くなっている。

さらに、信か偽か決しかねるステートメント

として、保守的ステートメントでは、「日本の豊かさを、保守政治に求める」ものには、高等学校生徒、大学学生、男女ともに多くなっている。また、「日米安全保障は国民の総意により侵略の不安を除く」とするステートメントには、高等学校生徒では、真か偽か決しかねるものが多いが、大学学生になると、偽とするものが多くなっている。進歩的ステートメントでは、「平和のために革新政権をつくる」、「幸せのため革新政権で政治をかえる」、両ステートメントともに、高等学校生徒、大学学生、をとおして真か偽か決しかねるとするものが多くなっている。

さらに、経済のカテゴリーのステートメントにおいて真であると確信するもの、あるいは、偽であると確信するもの、の顕著なステートメントについて考察すると、

保守的ステートメントでは「自由放任主義経済の是認」のステートメントについては、高等学校生徒、大学学生、男女とも偽とするものが多くなっている。また、「労働者の資本家への奉仕」と「労働組合の資本家要求への不当」、の両ステートメントについては、高等学校生徒男女とも、偽とするものも多いが、大学学生になるにつれて、偽と確信するものが、ますます多くなる。

また、進歩的ステートメントでは、「自由平等の社会は資本家と労働者の所得格差の否定による」というステートメントであるが、これに対しては、高等学校生徒、大学学生、男女とも、偽とするものが多くなっていて、進歩的ステートメントにおける特異な現象であり、平等の所得政策についての、高等学校生徒、大学学生の態度の一端がうかがえる。「不況は労働者にしわよせされる」「労働組合は経済を民主化するもの」とするステートメントについては、高等学校生徒、大学学生、男女とも、真とするものが多くなっている。

また、信か偽か決しかねるステートメントとして、進歩的ステートメントの「日本の経済発展を労働者の勤勉と低賃金政策に求める」ステートメントであるが、高等学校生徒では、信

か偽か決しかねるものが、かなり多いが大学学生になると、真とするものに多く移行している。

最後に、社会のカテゴリーのステートメントにおいて、真であると確信するもの、あるいは偽であると確信するもの、の顕著なステートメントについて考察すると、

保守的ステートメントでは、「目上の人に盲従」「天皇尊敬、特権階級復活」、両ステートメントとも、高等学校生徒、大学学生、男女とも偽とするものが多くなっている。

また、進歩的ステートメントでは、「幸福を私有財産否定の社会主義」にもとめるステートメントであるが、これに対して、高等学校生徒、大学学生、男女とも偽とするものが多くなっていて、これも進歩的ステートメントにおける特異な現象であって、私有財産否定の社会主義に対する高等学校生徒、大学学生の態度をうかがえるものと思われる。それから、「生活のためのストライキ是認」「自己否定してまで恩義に報いない」、両ステートメントについては、高等学校生徒、大学学生、男女とも真とするものが多くなっている。

さらに、信か偽か決しかねるステートメントとして、「婦人の社会的進出否定」のステートメントについては、高等学校生徒男子に真か偽か決しかねるものが多くなっているが、高等学校生徒女子と大学学生男女には、偽とするものが多くなっている。「離婚が世間体の対象とならない」のステートメントでも、真か偽か決しかねるものが、高等学校生徒、大学学生とも、かなり多くなっている。

Table 4は、高等学校生徒、大学学生において、政治、経済、社会のカテゴリーにおける、保守的ステートメント、進歩的ステートメントの各5段階評定における平均を百分率によって示したものである。

前述したごとく、政治、経済、社会の各カテゴリーにおいて、それぞれ、保守的ステートメントと進歩的ステートメントとの間に、尺度におけるウェイトそのものには有意差がなかったのであるが、Table 4によると、高等学校男女

Table 4

カテゴリー	態度	高 校 男 子					高 校 女 子				
		+ 2	+ 1	0	- 1	- 2	+ 2	+ 1	0	- 1	- 2
政 治	保 守	7.2 (2.16)	12.2 (7.92)	23.8 (5.94)	20.9 (3.82)	35.9 (5.14)	3.4 (1.00)	10.5 (3.21)	26.8 (10.11)	30.8 (7.35)	28.5 (17.41)
	進 歩	27.8 (13.49)	22.7 (1.65)	28.4 (1.02)	7.8 (2.71)	13.3 (3.21)	26.5 (14.80)	18.9 (8.52)	37.9 (15.96)	12.3 (4.98)	4.4 (1.72)
経 済	保 守	14.6 (10.49)	18.9 (12.81)	14.3 (6.02)	20.8 (5.92)	31.4 (16.55)	11.2 (6.59)	13.9 (7.22)	19.7 (2.29)	30.1 (2.62)	25.1 (7.09)
	進 歩	18.3 (9.44)	30.2 (7.26)	27.2 (6.55)	12.7 (7.19)	11.6 (5.75)	19.3 (9.62)	29.5 (2.73)	34.3 (9.17)	11.5 (3.66)	5.4 (3.43)
社 会	保 守	9.7 (6.01)	10.0 (3.59)	11.6 (5.53)	20.2 (4.69)	48.5 (16.44)	3.1 (1.74)	4.2 (1.39)	15.0 (4.32)	23.8 (3.68)	53.9 (5.71)
	進 歩	24.9 (9.10)	21.9 (8.61)	25.7 (8.00)	13.5 (6.57)	14.0 (6.04)	16.3 (4.03)	24.1 (8.22)	27.8 (6.23)	21.3 (4.70)	10.5 (3.10)

カテゴリー	態度	大 学 男 子					大 学 女 子				
		+ 2	+ 1	0	- 1	- 2	+ 2	+ 1	0	- 1	- 2
政 治	保 守	5.3 (1.08)	11.6 (5.10)	18.6 (10.20)	26.7 (3.37)	37.8 (14.89)	1.5 (0.65)	8.3 (2.99)	17.6 (19.53)	26.3 (7.24)	46.3 (8.74)
	進 歩	29.2 (10.68)	30.9 (8.31)	21.9 (5.88)	11.9 (4.59)	6.1 (2.06)	28.3 (26.35)	30.7 (5.02)	27.8 (5.68)	8.3 (2.97)	4.9 (0.20)
経 済	保 守	7.9 (5.03)	19.5 (12.08)	12.5 (6.23)	22.6 (7.63)	37.5 (1.89)	4.9 (1.27)	17.6 (7.36)	12.7 (2.82)	23.9 (8.81)	40.9 (11.99)
	進 歩	22.2 (12.04)	36.1 (7.29)	23.3 (10.51)	11.7 (6.25)	6.7 (4.56)	27.8 (9.56)	33.1 (5.46)	18.4 (5.10)	12.6 (4.47)	8.1 (2.83)
社 会	保 守	3.8 (1.53)	6.1 (3.07)	8.4 (2.76)	30.8 (9.67)	50.9 (11.99)	0.5 (0.80)	2.4 (1.34)	6.4 (1.20)	16.6 (3.19)	74.1 (3.88)
	進 歩	17.8 (10.02)	27.5 (8.34)	22.2 (5.83)	22.2 (7.95)	10.3 (44.8)	20.9 (7.47)	24.5 (7.19)	21.9 (4.29)	23.9 (7.03)	8.8 (2.76)

( ) = SD

生徒よりも大学学生男女とも、政治、経済のカテゴリーにおいて進歩性が強くなっている。一般的にいて、日本における大学教育は学生に革新性を与え、保守化をさまたげる枠組を提供していることは充分考えられる。しかし、日本の大学学生の進歩性も、主として、政治的、経済的社会現象についての進歩性が強く、社会的社会現象については、必ずしも高等学校生徒よりも進歩的であるとはいえないようである。そ

れは、社会のカテゴリーの進歩的ステートメントに対して真と確信するもの、社会のカテゴリーの保守的ステートメントに対して偽と確信するもの、の高等学校生徒と大学学生とは、あまり差異のないことからもうかがえるのである。

Newcomb (1943) もベニングトン大学における研究において指摘しているように、アメリカの大学生は上級生になるほど保守性を減じている。しかし、アメリカの大学生は、大学生以外の

人よりも保守性が弱いといっても、革新的ではなくして、大学生活は、個人の在学年数に応じて保守性を減じるような力を与えることはあっても、その力は弱く、卒業とともに所属階層や集団の影響のもとに、再び容易に保守化する、としている。一方、日本の大学生については、広瀬（1972）も指摘しているように、大学1、2年において急進化し、大学3、4年頃にはその萌芽をみせて、卒業後は顕著となる急進性の減退はドラマチックである、としているが、確かに、日本の大学生がジュニアコースにおいて急進化し、シニアコースになると、漸次、急進性を減退することは、急進的な学生自治活動が、主としてジュニアコースにおいて起こり、シニアコースになると漸次下火となることは、著者の経験するところであり、それは、専門課程における教育の特性と社会現象に対する認識というよりも、むしろ高等学校から大学への現状の特性と卒業後における就職の問題も、特殊な学生を除いては、革新性をさまたげる枠組となっていることも考えられる。広瀬のいうごとく、卒業後の顕著な急進性の減退や、著者のいう既存体制の認容は、卒業前すでにその萌芽の一端がうかがえるものと思われる。それはまた青年期終末における心理的特性かも知れない。

ともあれ、この実験の結果からは、大学ジュニアコースにおける学生の進歩性も、それが主として、政治的、経済的社会現象に対しての特性が強いものといわなければならない。前述したごとく、日本における大学教育が、学生に革新性を与え、保守化をさまたげる枠組を提供しているといっても、それは主として政治的、経済的社会現象についての準拠枠であって、大学教育が社会的社会現象について保守性をさまたげる枠組を提供しているか、疑問である。いま社会のカテゴリーにおいて、進歩的ステートメントについての5段階評定の評定について、高等学校生徒と大学学生との有意差を $\chi^2$ についてみると、 $\chi^2 = 3.04$ ,  $df=4$ ,  $0.50 > P > 0.30$ となって、社会的社会現象についての進歩性においては、高等学校生徒と大学学生との間に有意

差なしといえる。

最後に、高等学校生徒、大学学生が、いかなる程度に進歩、保守を是非としているか。すなわち、進歩保守の両端の30個のステートメントに対して、彼等が評定した図表を基として進歩保守の態度指数を測定した。彼等が各ステートメントの5段階評定に答えた各評点に1点を与え、いまRを進歩点、Nを真か偽か決しかねる点とし、態度指数をAQとすれば、

$$AQ = \frac{R + \frac{1}{2}N}{15} \times 100$$

となり、被験者による態度指数は Table 5 のご

Table 5

被 験 者	AQ
高 校 男 子	130
高 校 女 子	136
大 学 男 子	140
大 学 女 子	149

とくなる。Table 5によると、高等学校生徒よりも大学学生と学校在学年数が増すにつれて、進歩的となっている。しかも、男子よりも女子のほうが進歩的のようである。これを偏差値より7品等段階に分類すれば、Table 6のごとく

Table 6

AQ	品 等 段 階
50 以下	超 保 守 的
51 — 70	非常に保守的
71 — 90	保 守 的
91 — 110	普 通
111—130	進 歩 的
131—150	非常に進歩的
151 以上	超 進 歩 的

なる。Table 6によると、高等学校男子では進歩的であるが、高等学校女子、大学学生となると非常に進歩的である。高等学校生徒、大学学生はかなり進歩的であるが、革新的ではなく、

とくに大学学生では、ジュニアコースにおいてかなり急進性を帯びているものと、いわなければならぬ。

#### Ⅳ 要 約

1) 青年学生思想傾向を社会的現象の具体的場面においてとらえるために、政治的、経済的、社会的社会現象についての態度の測定をおこなった。

2) 社会的現象についての態度を、保守—進歩の両極にとり、国内および国際的な社会現象から、政治的、経済的、社会的ステートメントとして、保守的ステートメント15個、進歩的ステートメント15個、計30個のステートメントを実験材料とした。

3) 30個の実験材料について、高等学校生徒133名、大学学生113名に、5段階評定の真偽テストをおこなった。

4) 全般的傾向として、高等学校生徒、大学学生をとおして、男女とも、政治的、経済的、社会的社会現象について、かなりの進歩的傾向をもっている。

5) 高等学校生徒よりも大学学生がかなり進歩的であるが、それは主として政治的、経済的社会現象についての進歩性が強いのであって、社会的社会現象については、高等学校生徒と大学学生とはほとんど差異はない。

6) 高等学校生徒、大学学生について、社会現象についての態度指数を出して、7段階の品等段階に分けると、高等学校男子は進歩的となり、高等学校女子、大学学生は非常に進歩的となっている。

#### 引用文献

- 鮎戸 弘 1970 イメージの心理学 潮出版  
Carlson, H.B. 1934 Attitudes of undergraduate students. *J. soc. Psychol.*, 5, 202-213.  
Droba, D.D. 1933 The nature of attitudes. *J. soc. Psychol.*, 4, 444-463.  
Eysenck, H. 1944 General social attitudes. *J. soc. Psychol.*, 19, 207-227.  
Ferguson, L.W. 1939 Primary social attitudes. *J. Psychol.*, 8, 217-223.

広瀬弘忠 1971 政党支持と政治関心の構造分析 心研、42、175—184.

広瀬弘忠 1972 政治的社会化過程における〈政治的知識〉と〈政治的態度〉の関連 心研、43、238—250.

Johnson, M. 1942 A preliminary study of social attitudes. *Brit. J. Educ. Psychol.*, 12, 183.

Katz, D. & Allport, F.H. 1931 Students' attitudes. Syracuse : Craftsman

河合榮次郎、蠟山政道 1938 学生思想問題 岩波書店

北野榮正 1952 現代青年学生に於ける思想傾向について 古賀行義先生還暦記念心理学論文集 154—161.

北野榮正 1955 視的再生・再認に及ぼす進歩的・保守的語とその価値の影響 心研、225—229.

北野榮正 1970 記憶痕跡に関する社会心理学的研究—態度の記憶とその変容について— 心研、310—318.

京極純一 1961 政治的イメージの測定について 東京大学教養学部社会科学紀要 42、1—52.

松山安雄、田中国夫 1954 社会的態度の測定論的研究Ⅲ—社会的態度に於ける類型因子について— 心研、25、174—180.

Murphy, G., Murphy, L.B., & Newcomb, T.M. 1937 Experimental social psychology. New York : Harper & Row.

中邑幾太、中邑平八郎 1967 社会的態度のメカニズムの実験的—考察 教心研、15、203—209.

Newcomb, T.M. 1943 Personality and social change : Attitude formation in a student community. New York : Holt, Rinehart & Winston.

Sanai, M. 1951 An experimental study of social attitudes. *J. soc. Psychol.*, 34, 235—264.

田中国夫 1954 社会的態度の測定Ⅱ 心研、24、277—284.

田中国夫、松山安雄 1955 社会的態度の測定論的研究(Ⅳ)—R.T. 2因子について— 心研、26、141—147.

田中国夫 1964 日本人の社会的態度 誠信書房

Thurstone, L.L. 1934 Vectors of the mind. *Psychol. Rev.*, 41, 1—32.

Vetter, G.B. 1930 Measurement of social and political attitudes. *J. abnorm. Soc. Psychol.*, 25, 149—189.

〈付記〉本実験のため特別の協力をいただいた桜丘高等学校川岸教諭、また被験者として協力ねがった同校生徒および金沢美大学生に感謝の意を捧げる。